

特集 ■ 脳卒中リハビリテーションの新しい展開

脳卒中治療に関する国内外のエビデンスが飛躍的に増え、「脳卒中治療ガイドライン 2009」としてガイドラインが改訂され、それに基づいた治療・リハビリテーションが実施されている。その後も脳卒中リハビリテーションの進歩、回復期リハビリテーション病棟や地域連携パスなどの変化など、新たな展開がみられている。今回の特集では、ガイドライン 2009 以降の進歩や知見を加味して、現在注目されているトピックスについて解説いただいた。

リハビリテーションシステム (高橋秀寿氏ら, 1135 頁)

Stroke unit (SU) のエビデンスとわが国の現状が述べられ、今後の SU システムとして早期退院支援システム (ESD) が紹介されている。SU の地域連携の問題点として、SU 以降の回復期病棟や療養型病床の不足によりスムーズな転院の流れが滞っている地域もあり、地域連携システムの再構築の必要性がある。また、質の高い脳卒中リハビリテーションの提供においてリハビリテーション科専門医の役割の重要性が述べられている。

薬物療法 (森真由美氏ら, 1143 頁)

脳卒中再発予防の観点から脳梗塞と脳出血に分けて、薬物療法のポイントを解説している。また、脳卒中回復期～維持期にかけて、リハビリテーションや自宅復帰の妨げとなる合併症に対する薬物療法にも言及している。抗血小板薬の併用療法により脳出血のリスクが高まること、脳梗塞の前ぶれ発作である TIA の重要性が述べられている。再発予防の観点から、急性期から地域生活期に向けた一方向性の地域連携を見直し、新たな形態 (双方向共有型、複雑循環型) での対応の必要性についても触れている。

神経リハビリテーション (河野悌司氏ら, 1151 頁)

運動機能などの回復に伴い脳の機能的再構築が起こることが明らかとなり、適応的な脳の可塑性を促進するアプローチとして「神経リハビリテーション」が提唱されている。そのなかでも代表的な CIMT, BWSTT, 経頭蓋磁気刺激, ロボット補助訓練について、その背景と考え方、エビデンスレベルについて解説を加えている。

ADL 評価・訓練 (小山哲男氏ら, 1157 頁)

効率的かつ有効な脳卒中リハビリテーションを実施するには、患者ごとに適切な目標設定に基づいた計画的な取り組みが必要であり、機能予後予測の視点から ADL 回復の実際や ADL 項目の難易度に関する理解が重要である。ロジスティック解析による FIM 運動関連項目難易度に関する知見、急性期における mRS 値による FIM 値の推定法、脳 MRI 拡散テンソル法による ADL 予測について症例提示も含めて解説している。

うつ、アパシー (岡田和悟氏ら, 1165 頁)

脳卒中後うつ状態および脳卒中後アパシーについて、脳卒中ガイドラインの基礎資料となった 2006 年以降の主要な文献を中心に、その評価、対応、治療について概説している。脳卒中リハビリテーション実施にあたって、情動行動障害が疑われる場合には積極的にスクリーニングをし、それぞれの病態に応じて対応や薬物療法を行うことが、円滑なリハビリテーション実施につながり、患者の QOL や予後を改善するうえで重要であることが述べられている。

書 評

映画で学ぶ特別支援教育 (高橋正雄) … 1227

ニュース

ALS 訴訟、介護の時間増命じる一和歌山市は即時抗告… 1142 「被災地支援ネットワーク事業」創設、被災した障害者就労事業所を支援—日本セルフセンター… 1164 「ノーマライゼーション・障害者の福祉」2011 年 10 月号特集目次… 1170 ユニバーサルタクシー誕生—国交省がマーク公表… 1180 電動車いす事故多発、運転には注意を—消費者庁… 1217

お知らせ

第 35 回日本リハビリテーション工学協会車いす SIG 講習会 in 高知… 1199